

沖縄県におけるコンクリート橋梁の劣化損傷事例と対策基準の変遷

沖縄総合事務局 北部国道事務所 川間重一

- ・コンクリート橋の予防保全の難しさは何か？
- ・補修は、何かやったという意味で「安心」だが、果たして「安全」だと言い切れるか？

塩害劣化事例(RC)



塩害劣化事例(プレテン橋)



塩害は、目視と詳細調査で特定だが。

- ・損傷は派手でも、塩分量が少ないこともある。

詳細調査で空振りするケース

- ・損傷は少なくとも、塩分量が多いこともある。

変状見られなければ詳細調査をしないケース。

- ・補修直後は、「安心」して経過観察を忘れる。

補修材の内部は、劣化の特定が困難。

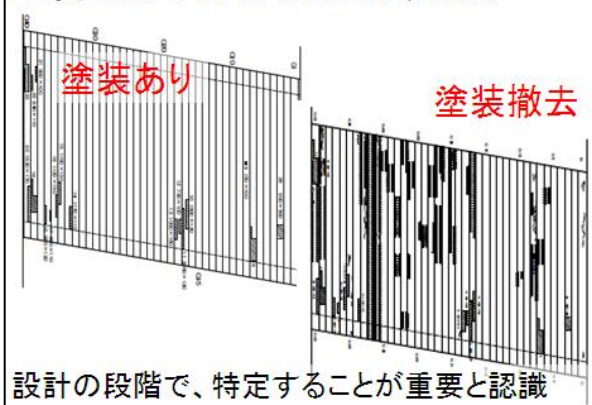
塩害コン橋の**予防保全**の難しさ。

プレテン塩害橋の事例

- ・コンクリート塗装上から補修範囲を特定したため、補修工事で手戻りが生じた。
- ・プレテン橋の限界を知った。



塗装有無の前後で調査を実施。



- ・コンクリート塗装は、いっそのこと剥ぎ取ってしまえ。



※ただし、添加物の設置、落橋防止システムなどが後付けされた結果、目視調査すら困難な部位がでてくる。そういう維持管理の重要性を認識したうえでの、後付け部材の設計が重要。

- ・補修跡は分かるようにしてしまえ。



※構造物そのものに何かやっていることが分かれば、何らかの情報があることが自ずと分かる。

その他

- ・「対策基準」はないが、「対策の考え方」は議論していくべき。
- ・個別の橋に特化した対策を考えていく必要性。
- ・政策的な矛盾。維持管理の必要性を認識しているものの、相応の人や予算を充当できない。
- ・道路管理者側にも、朝令暮改の入札契約制度等事務により、技術力の低下を加速させる背景。